

井手 聡一郎

(公財) 東京都医学総合研究所・依存性薬物プロジェクト

研究課題、タイトル

Association between genetic polymorphisms in Cav2.3 (R-type) Ca²⁺ channels and fentanyl sensitivity in patients undergoing painful cosmetic surgery

コメント

この度、インドネシア（Nusa Dua, Bali）において開催された5th Congress of Asian College of Neuropsychopharmacologyに参加しました。私個人としては、AsCNPは2回目の参加となり、インドネシアへの訪問は初めてでした。成田からの直行便でデンパサール空港に到着し、まずは熱帯地方らしい熱気に圧倒され、早速スーツを脱ぐことが最初にしたことでした。大会期間中は好天に恵まれ（会場内で気付かなかったタイミングでスコール？もあったみたいですが）、多くの方が会場を訪れ、熱帯地方特有の熱気に負けない程度の、熱気のある大会であったと感じました。どのセッションにおいても活発な議論が行われ、神経精神薬理学研究の最新の知見を得られ、非常に勉強になりました。特に依存症に関して、そのトレンドに様々なお国柄があることが印象的で、各地域に根付いた研究の必要性を感じました。

発表では、基礎研究者を中心に国内外の研究者にポスターを見て頂き、指摘された点はどれもとても参考になり、研究結果を考察する良い機会であったと思います。最後になりますが、日本神経精神薬理学会よりJSNP Excellent Presentation Award for AsCNP 2017を頂きまして大変光栄に存じます。ご指導頂きました先生方に深く御礼申し上げます。今後の神経精神薬理学研究の発展に貢献できますよう精進したいと思います。



大井 一高

金沢医科大学医学部精神神経科学

研究課題、タイトル

Variability of 128 Schizophrenia-Associated Gene Variants across Distinct Ethnic Populations

コメント

私は、2017年4月27日から29日にかけてインドネシアのバリ・Bali International Convention Centerにて開催されました第5回アジア神経精神薬理学会 (5th Asian College of Neuropsychopharmacology; AsCNP 2017) に参加し、Young Psychiatrist AwardおよびJSNP Excellent Presentation Award for AsCNP 2017を頂きました。日々の研究成果が、このような名誉ある受賞に繋がり、大変嬉しく思っております。バリを訪れたのは、今回の学会が初めてでした。天候にも恵まれ、世界遺産にも登録されておりバリ島で最も美しいとされるタマン・アユン寺院や海の上に浮かぶ神秘的なタナ・ロット寺院などのバリの名所を観光した他、ナシゴレンやミーゴレンなどのインドネシア料理を堪能してきました。

私が今回上記の賞を頂きました内容を、簡単ではありますが、まとめさせて頂きます。統合失調症は、民族差なく人口の約1%が罹患し、80%の高い遺伝率を示す多因子遺伝疾患であり、病態には多数の遺伝子が関与しています。これまでに、Psychiatric Genomics Consortiumにより世界中から36,989名の統合失調症と113,075名の健常対象者サンプルを集めて行われた大規模な全ゲノム関連解析研究(Genome-wide association study: GWAS)では、108ゲノム座位に存在する独立した128個の遺伝子多型が疾患の病態に関わることを見出しています。しかし、この大規模GWASは世界中からサンプルを集めていますが、サンプルの大部分はヨーロッパ白色人種由来であり、アジア人サンプルは1,836名の統合失調症と3,383名の健常者に限られています。

本研究では、統合失調症は民族差なく1%の頻度で罹患し、遺伝率は80%であるというエビデンスに基づき、大規模GWASにて同定した128個の遺伝子多型の民族間の差異を検討しました。1000 Genomes ProjectにおけるAfrican (AFR)、American (AMR)、East Asian (EAS)、European (EUR)、South Asian (SAS) サンプルを用いて、民族間における128個の遺伝子多型のアレル頻度のばらつき (Variability Index: VI) を算出しました。VIを用いてうまく民族間におけるアレル頻度のばらつきを検出できました。例えば、ばらつきの最も小さいrs36068923のEAS, EUR, AFR, AMR, SASのマイナーアレル頻度はそれぞれ0.189, 0.192, 0.256, 0.183, 0.194でした。一方、ばらつきの最も大きいrs7432375は0.791, 0.435, 0.041, 0.594, 0.508でした。さらに、GWASの主な構成民族であるEURとEAS間で128個の遺伝子多型のアレル頻度の差異を検討したところ、約70%に民族間のアレル頻度に有意な差異を認めました。しかし、Polygenic risk scoreの概念の様に、128個の遺伝子多型のアレル頻度を平均すると、民族間で差異を認めませんでした。以上の結果より、個々の遺伝子多型が疾患に寄与する割合は民族間で異なりますが、その総和では違いを認めず、このこ

とが民族差なく約1%の生涯罹患率に繋がっているのではないかということが示唆されました。

また、本学会では、アジア諸国の若手研究者が集うEarly Career Psychiatrist Gathering Nightにも参加させて頂き、同年代の研究者の熱意のあるプレゼンテーションを聞くことができ、さらに、交流する機会もあり、大きな刺激を受けました。

末筆となりましたが、今回のYoung Psychiatrist AwardおよびJSNP Excellent Presentation Award for AsCNP 2017の受賞にあたり、常日頃よりご指導ご鞭撻を賜りました皆様、および学会関係者の皆様に深く御礼申し上げます。この受賞を糧に、更に日々の研究に邁進していきたいと思っておりますので今後とも宜しくお願い申し上げます。



Wulaer Bolati

名古屋大学大学院医学系研究科・医療薬学

研究課題、タイトル

Disruption of exons 2 and 3 of the Disc1 gene in the mouse is associated with elevated repetitive behavior

コメント

I participated and presented my work in 5th Congress of Asian College of Neuropsychopharmacology (AsCNP 2017) which was held at Bali International Convention Center, Bali, Indonesia on 27-29th April 2017. I am honored for receiving the JSNP Excellent Presentation Award for AsCNP 2017. It was an outstanding conference, lots of high quality works presented during the meeting. And I believe it will have significant impacts on the development of medical science in future.

This conference is an ideal platform for exchange experiences with other participants because it is an international forum, including researchers and education scientists who are experts in neuroscience field.

It was a great opportunity for me to interact with the scientists from other Asian countries and had discussion about their ongoing research focusing on animal behavioral testing and neuronal manipulation techniques which may help me to improvise and highlight my current project with the novel ideas and methods.

Apart from discussion about research, we had great time while travelling and visit to famous places in Bali. The delicious food and local people's hospitalities amazed me.

I am thankful to the JSNP for giving me such recognition at this event. This award strengthens even further my motivation towards working harder in my future research. Moreover, I want to congratulate other researchers, who also received the award.



祖父江 顕

名古屋大院・医・医療薬学

研究課題、タイトル

Behavioral and neurochemical abnormalities in MHCI-expressed mice

コメント

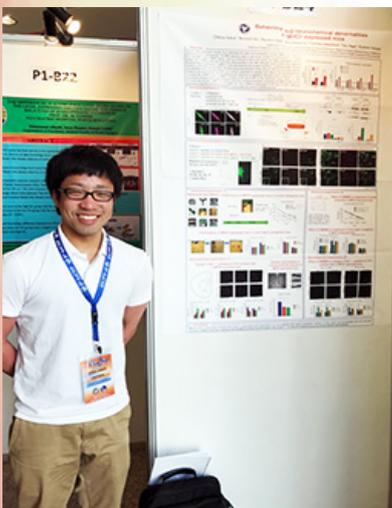
名古屋大学大学院医学系研究科医療薬学研究室 博士課程四年の祖父江 顕と申します。今回、2017年4月にインドネシアのバリ島で開催された第5回アジア神経精神薬理学会（The 5th Congress of Asian College of Neuropsychopharmacology; AsCNP2017）にてポスター発表をさせて頂きました。また、JSNP Excellent Presentation Award for AsCNP 2017を頂いたことを大変光栄に存じます。

私自身、海外での発表経験が浅く、学会前から非常に緊張しておりました。しかし、現地に到着してみると、自然豊かなバリ島の環境や学会会場の落ち着いた雰囲気により緊張も自然と和らいでいきました。

シンポジウムについては自身の行っている基礎研究、特に動物モデルを用いた神経精神疾患の研究について勉強させて頂きました。日本以外にもアジア各国の先生方のご発表もあり、新しい知識の習得はもちろんの事、アジア各国の研究状況や日本の神経精神疾患研究におけるアジアの中での位置づけのようなものも、この学会を通して認識することができました。

ポスター発表については「Behavioral and neurochemical abnormalities in MHCI-expressed mice」というタイトルで発表させて頂きました。様々なご質問やご指摘を頂き、今後の研究課題が明確になりました。さらに、日本人以外の先生方からもご質問を頂き、英語での質疑応答における経験を重ねることができました。

最後になりましたが、JSNP Excellent Presentation Award for AsCNP 2017の受賞に関しまして、ご指導頂きました先生方、学会関係者の皆様に、この場を借りてあらためて御礼申し上げます。今後、少しでも神経精神薬理の発展に貢献できればと考えております。





シンポジウム後の風景—シンポジスト集合—



ホテルロビーにて



東京都医学研の先生方とご一緒させていただいた時の写真



ナシゴレン

中本 賀寿夫

神戸学院大学薬学部

研究課題、タイトル

Dysfunction of GPR40/FFAR1 signaling exacerbates pain behavior in mice

コメント

2017年4月27 - 29日にバリで開催された第5回アジア神経精神薬理学会(AsCNP)大会に出席しました。私は「Molecular Aspects of Pain toward Future Diagnosis and Treatment」のシンポジウムとポスターで発表をさせていただき、大変貴重な経験をさせていただきました。まず今回は、初めての海外での口頭発表ということで、準備段階から当日まで大変緊張した日々を過ごしました。準備にあたっては、不安で眠れない日が続き、発表の際に頭が真っ白になってしまう悪夢(?)など、これまでにない不安な日々を過ごしましたが、なんとか乗り越えることができたように思います。また、英語の大切さも感じることができ、次回もこのようなチャンスが頂けるよう、これからもコツコツと研究し、頑張っていこうと改めて決意致しました。

さて、現地での様子も少し紹介させていただきます。関西国際空港からガルーダ航空で出発し、7時間ほどのフライトでデンパサール空港に到着しました。到着ロビーでは、客を待つツアー会社の方で溢れており、おそらくサーフィンやスパなどを楽しむ観光客と思われる方たちで溢れておりました。町中への移動は、電車やバスなどの公共交通手段がないため、バイクや車になります。日本車がほとんどです。信号がないため、警察官らしきヒトが、手で交通整理をしていたり、バイクはノーヘル、3人乗り、子供を乗せていたりと何でもありの状況に驚くばかりでした。

バリでの食事は、ナシゴレン、ミーゴレンさらにダックなど美味しい食事が多く、大変満足することができました。特に、バリコーヒはとてもおいしかったです。会場のヌサ・ドゥア地区は警備もしっかりとされていて、危ないと感じる場面は殆どありませんでした。道路を散歩していると突然、野生のリスやサルに遭遇することもあり、のんびりとしていて自然豊かな国だなと感じました。

最後に、今回の発表に際しまして、日本神経精神薬理学会よりJSNP Excellent Presentation Award for AsCNP2017をいただきました。立派な賞を頂きまして大変光栄に存じます。発表に際しご指導いただきました徳山尚吾先生をはじめ、共同研究者の先生方および臨床薬学研究室の皆様に深く御礼申し上げます。

梅原 英裕

徳島大学大学院医歯薬学研究部精神医学分野

研究課題、タイトル

Pharmacometabolomic changes following antidepressants in patients with major depressive disorder.

コメント

空港の到着ゲートを出るなり、突然荷物を勝手にタクシー乗り場まで持っていかれ、お金を請求されるという先制パンチを受けました。着いたばかりで小銭も少なく、結局大金をせしめられてしまいました。しかし、その後、出会った現地の方々には、温かく、親切に接してもらったので、最初の嫌な思い出は薄れていきました。食事に関しては、ナシゴレン、ミーゴレンをホテルで食べた時は微妙な味だったのですが、街に出て食べた時は最高に美味しかったです。食事の度についてくるKerupuk（クルプック：インドネシアのエビせん）は、やみつきになりました。

私はヒト由来サンプルを用いた研究ばかり行っておりますが、精神疾患の基礎研究を主に行っている先生方とも交流する機会があり、様々な情報交換ができました。また、かなり臨床的な内容の発表もあり、アジアの他の国における精神疾患の特徴や治療について、日本との相違点などを考えながら拝聴させていただきました。非常に有意義な学会を過ごすことができました。

この度は、JSNP Excellent Presentation Award for CINP 2017という賞をいただきましたことを心より嬉しく思っております。今回の経験もいかし、さらに研究に精進してまいりたいと思います。

萩原 英雄

藤田保健衛生大学

研究課題、タイトル

Lower brain pH as a shared endophenotype of psychiatric disorders

コメント

この度、4月27日(木)~29日(土)にバリ国際コンベンションセンターにて開催された第5回アジア神経精神薬理学会 (The 5th Congress of Asian College of Neuropsychopharmacology; AsCNP2017)に参加いたしました。

AsCNP大会への参加は、前回2015年の台北大会に続く2回目となりました。前回の参加時には知り合いの先生がほとんどいなかったのですが、今回は気軽にお話させていただける方もおられ、この分野での繋がりも徐々にですがこの2年のうちに広がってきたのかなと感じた次第です。

今回、ポスター演題において、統合失調症と双極性障害の患者およびモデルマウスの脳のpHが低くなっておりいくつかの精神疾患に共通する中間表現型の一つではないか、という内容の発表をいたしました。しかし、精神疾患における脳pH低下の意義についてはまだまだ不明な点が多く残されています。この研究をどのように進展させていこうか模索していたところ、ディスカッションさせていただいた先生からは、精神疾患研究でこれまで多く指摘されているGABAergic神経の異常などの脳内指標との相関を見てみてはどうか、などの貴重なアドバイスをいただき、大変有意義な機会となりました。

最後になりましたが、この度、上記のポスター発表演題におきまして、JSNP Excellent Presentation Award for AsCNP 2017を受賞しましたことを大変光栄に存じます。日々の研究成果がこのような賞に繋がり大変嬉しく感じています。ご指導ご鞭撻を賜りました皆様、学会関係者の方々にこの場をお借りして深く御礼申し上げます。今回の受賞を励みに、今後とも研究に邁進していきたいと考えております。

古田島(村上) 浩子

(公財) 東京都医学総合研究所・
依存性薬物プロジェクト

研究課題、タイトル

Inhibition of mTOR improves autism-like behaviors in mice in utero exposed to valproic acid

コメント

2017年4月27-29日にかけてインドネシア・バリにて開催された5th Asian College of Neuropsychopharmacology (AsCNP)に参加しましたので、報告させていただきます。日本はまだ寒が残る4月の出発でしたので、デンパサール空港に着いた時は、湿度の高さと暑さに驚きました。個人的にはバリを訪れるのは2回目になりますが、南国の人々のパワーが空港や街中でもみなぎっており、とても好きな地域の一つです。AsCNP2017の会場となったBali International Convention Centre (BICC)は、開放的な造りとなっていて、各会場の行き来や懇親会会場への移動もスムーズに行うことができました。

各会場で行われた発表において、インドネシアの精神疾患研究に関する発表などが聞けて、大変興味深かったです。さらに、口頭発表ではアルコール依存症に関する臨床研究の発表、またポスターセッションではマウスの攻撃行動に関する基礎研究の発表を拝聴し、議論することができました。双方とも今後の研究の参考になるとともに、新たな知識の吸収を行うことができ、大変有意義な時間を過ごすことができました。

末筆にはなりますが、今大会において、JSNP Excellent Presentation Award for AsCNP 2017を受賞することができ、大変光栄に思います。ご指導いただいた先生方、また共に研究の議論を深めてくださった研究室のメンバーに厚く御礼申し上げます。今後とも学会に積極的に参加し、社会的意義があり学術的にも興味深い研究ができるように精進していこうと思います。



柏井 洋文

公益財団法人東京都医学総合研究所依存性薬物プロジェクト

研究課題、タイトル

Rapamycin treatment of impaired social behavior in adolescent Tsc2+/- mice

コメント

2017年4月27日から29日にインドネシアのバリ島で開催されました第5回 Asian College of Neuropsychopharmacology (AsCNP)に参加致しました。私自身は神経精神薬理関係の国際学会は昨年のCINPに引き続いての参加となりました。現地は幸い天候に恵まれました。南国の強い日が差し、ヤシの木に囲まれ、近くのビーチには青い海が広っており、リゾート気分誘われそうになりましたが、一步会場に入ると学術的な熱気に溢れていました。

今回の学会ではJohn H.Krystal先生のkeynote lectureを含めケタミンに関する発表が多いように感じました。私自身はもともと小児科医で、今は精神疾患のモデル動物を用いた研究をしていますので、疾患モデル動物を用いた研究、トランスレーショナル研究および臨床で薬剤使用経験の発表などを中心に拝聴し、大変刺激を受けてきました。またインドネシアやマレーシアからの発表では、まだ十分な研究環境が整っていないかもしれない中で意欲的な研究をされていることに感銘を受けました。

ポスターセッションも基礎研究から臨床の症例報告まで幅広い分野での発表があり、臨床医としても基礎研究者としてもどちらの視点からも大変興味深く拝見しました。

最後にこの度、JSNP Excellent Presentation Award for AsCNP 2017を受賞させていただき、誠に光栄に存じます。この場をお借りしてご指導ご鞭撻を賜りました先生方、学会関係の皆様にも厚く御礼申し上げます。この受賞を励みに更に研究意欲を高め、神経精神薬理分野の研究の発展に少しでも貢献できるように日々精進したいと思います。

毛利 彰宏

藤田保健衛生大学大学院医療科学専攻
先進診断システム探索研究部門

研究課題、タイトル

The ubiquitination of serotonin transporter in lymphoblasts derived from fluvoxamine-resistant depression patients

コメント

2017年4月27日～29日に第5回アジア神経精神薬理学会（5th Asian College of Neuropsychopharmacology: AsCNP2017）がインドネシア・バリ島ヌサドゥアで開催されました。本会に参加するにあたり、JSNP Excellent Presentation Award for AsCNPを授与下さいましたこと、厚くお礼申し上げます。

AsCNPへの参加は、2011年9月にソウルで開催されましたAsCNP2011以来、2回目の参加となります。比較的日本と気候が近いソウルに比べ、赤道近くのヌサドゥアは非常に暑く、一足早く夏を迎えることになりました。気候に劣らない熱気と活気に溢れて学会の初日が始まりました。本年会では、3日間の開催期間を通して、4つのプレナリー・レクチャー、24のシンポジウムと基礎から臨床まで幅広いテーマが取り上げられ、どのセッションにおいても非常に活発な議論が行われていました。初日に精神疾患のバイオマーカーについて、二つのシンポジウムが同時に開催されるなど、同時時間帯に拝聴したいテーマが多くあり、悩ましいかぎりでした。2日目は、鍋島俊隆先生とHyoung-Chun Kim先生が座長となり、齋藤邦明先生、Lih-Chu Chiou先生、山田清文先生、Hyoung-Chun Kim先生のシンポジウムを拝聴しました。共同研究をさせていただいている先生方のご発表から改めて研究を俯瞰することができ、さらに私が貢献できることなど提案することができました。3日目には自らのポスター発表があり、今回はこれまでのうつ病モデル動物を用いた基礎研究を基盤とした、うつ病バイオマーカーの臨床研究を発表いたしました。基礎研究者だけではなく、臨床研究を行う精神科医や研究者と研究成果について議論することができ、多くの質問や提案を頂きました。自らでは異なった観点からの指摘は自分の研究の新たな方向性を検討する良い機会となり、大変参考になりました。海外の共同研究の先生に自分の研究内容を紹介することもでき、研究を発展させるきっかけにもなりました。

最後に、ご指導いただいた先生方、研究を一緒に進めてくれた院生・学生には、この場を借りて深く御礼を申し上げます。これからも、神経精神薬理学分野の研究の発展に貢献できるよう精進して参りたいと思います。